Osaka University Knowledge Archive

Title	デザインミュージアムの可能性 : 建築博物館がない！
Author(s)	五十嵐, 太郎
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 112-113
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71211
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

デザインミュージアムの可能性 ── 建築博物館がない！ ──

五十嵐太郎　東北大学

海外に出かけるときは，なるべく国立博物館を訪れるようにしている。手っ取り早く，その国の歴史と文化を理解できるからだ。およそ10年前，フィリピンの国立博物館を見学したら，建築をテーマにした部屋があり，写真やパネルを中心とした簡単な展示だったが，一応，古建築から近現代までの流れをたどることができる。またシンガポールに新しくオープンしたナショナル・デザイン・センターでは，建築，都市開発，プロダクト，ファッションなど，各種のデザインの50年の歴史を通覧できる展示が用意されている。わざわざ，この二カ国の名前を挙げたのは，日本よりも経済規模が小さいアジアの国でさえ，こうした建築の展示があるのに対し，日本にはそれに類するものがないからだ。上野の国立博物館をまわっても，絵画，彫刻，工芸に絞られており，建築は蚊帳の外である。したがって，日本に訪れた外国人，あるいは建築を学びはじめた学生が，ここにいけば，まずは日本における建築の流れをざっと知ることができる場所が存在しない。

いや，東京にはギャラリー間や GA ギャラリー，あるいは国立近現代建築資料館があるじゃないか，という反論があるかもしれない。だが，いずれも常設の展示はなく，企画展のみである。言うまでもなく，常設とはイベント的な企画展とは違い，収蔵するコレクションを軸とした展示であり，一部の入れ替えはあっても，概説のように，全体の歴史を伝えるものだ。もっとも，安定した常設展を提供している数少ない施設としては，神戸の竹中大工道具館が存在する。が，基本的には近現代以前の時代を扱い，また建築というよりは道具に焦点を当てている。本来ならば，その対象がさらに拡張した博物館が必要だろう。移築による野外博物館としては，古民家を展示する川崎市立日本民家園，フランク・ロイド・ライトの帝国ホテルを契機に近代建築の収集を始めた明治村のほか，古建築から近代までを射程に入れた江戸東京たてもの園が健闘している。ただし，古代から現代までを網羅しているわけではない。また都心にないため，アクセスは良くない。

ちなみに，国立近現代建築資料館は，英語の名称がナショナル・アーカイブの施設となっているように，厳密にいうと，ミュージアムではない。実際，その活動は寄贈を受けた平面資料の収集を軸としており，展示は行うものの，必ずしもメインの事業ではない。これが美術館・博物館と大きく異なる点だ。また収蔵スペースの問題から模型などの立体は基本的に受け入れておらず，メタボリズムほか近現代建築の貴重な模型などは，パリのポンピドーセンターなど，海外に流出が今も続いている。こうした状況は，かつての浮世絵のようだ。ポンピドーセンターは，ニューヨークの MoMA のように，美術館の中に建築部門があり，オブジェとして見栄えする模型を積極的に欲しがっている。むちろん，それでも民間ではなく，永続性をもつ「国立」の建築資料館が誕生したことの意義は大きい。資料の散逸を防ぐ防波堤となり，いずれ予算がつけば，現在の間借り状態を脱出し，きちんとした展示施設が整備される可能性があるからだ。

実際，デザイン業界から建築はうまくやったねと羨ましがられている。三宅一生はだいぶ以前から国立デザインミュージアムをつくろうと提唱し，運動も起こしているが，なかなか成立しない状況におそらく業を煮やし，自ら六本木に21_21 DESIGN SIGHT を立ち上げた。日本の各都道府県，各市に膨大な数の公立美術館がつくられたのに，建築を含むデザイン博物館が全然ないのはあまりにバランスが悪いだろう。日本の建築やデザインは世界から高く評価され，「日本の家」展（国立近代美術館）や「建築の日本」展（森美術館）のように，美術館で開催される建築展の動員も好調なのに，建築系の学芸員は極少数である。フランスでは各地方の美術館に異なる専門性を振り分け，オルレアンに20世紀以降の実験建築をターゲットにしたアーキラボが設立された。日本でも，あらゆる美術館が同じように印象派の絵画を購入するのではなく，それぞれに特色を与え，建築やデザインを専門とする施設を幾つか誕生させれば，よかったのではないだろうか。

オランダ，フランス，カナダには，立派な建築博物館がある。コレクションも充実しており，自国の建築に関する資料がきちんと保管される場をもつ。例えば，パリの建築文化財博物館は，中世の教会の断片のほか，ル・コルビュジエのユニテの原寸大模型，そして現代建築までカバーしている。こうしたミュージアムが存在しているからこそ，建築の歴史的な価値が共有され，文化として認められるのではないか。日本の建築界はがんばっており，実際にそれだけの成果も上げていると思うが，新聞やテレビなどのメディアの報道を見るかぎり，いまだに社会からの認知度は低い。日本もバブルのとき，おそらく建築業界はお金が余っていたのだから，建築博物館を創設しておけばよかったと思うが，もう後の祭りである。ともあれ，現在の日本にそれはない。いつでも外国人を案内できる常設展をもった建築博物館が存在することは，単に過去を知ることだけでなく，建築界の未来のためにも重要なことではないだろうか。

ところで，2018年５月，美術館が所蔵するコレクションを市場に売却し，アートマーケットを活性化する構想が報じられ，話題になった。以前，筆者が国立デザイン美術館のシンポジウムに登壇したときも，学生から収蔵・研究よりも，クラウド・ファンディングで企画，イベントをやって集客する今風のアイデアを披露され，違和感を抱いた。

ミュージアムはただ企画展を行う場ではなく，作品を永続的に収蔵・保存・研究することが最重要の役割だ。美術館が売買で儲けたり，民間のマーケットを一時的に活性化するために，コレクションが存在するのではない。美術館にとっては，どういう作品を所有しているか，またその質と量こそが大事である。ルーブル美術館や MoMA にしても，企画展の内容に関係なく，圧倒的なコレクションがあるから，常に大勢の人が訪れている。以前，筆者がアーティストの彦坂尚嘉による皇居美術館空想のプロジェクトに賛同し，展示や本の企画を行ったのは，日本でもとんでもないコレクションを誇るミュージアムが必要だと考えたからだ。が，建築学生の美術館設計を見ても，常設のエリアを重視していないように，そもそも日本では美術館がイベント会場程度にしか思われていないのかもしれない。王を処刑し，宮殿を美術館に転用した国と比べると，日本は近代に導入した舶来のハコモノであり，本当の意味で根付いていないのだろう。ゆえに，近代の底が抜け，今度は国が「美術館」を経済原理と結びつく別の施設に変えようとしている。